

第73回国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 特賞

学習院女子高等科 3年

伊佐野 和花

課題 ②

今年は新たな国連事務総長が選出されるが、もしあなたが次期国連事務総長に選ばれたら国連をどのような組織にしたいか。

副題

なし

本文

②

皆さんは今、「ロシア」や「ウクライナ」と聞いて、何を思い浮かべますか。両国の国旗あるいは大統領の顔、ニュースで連日流れる戦争の映像かもしれません。かつての私もそうでした。幼い頃から国旗が好きだった私は、国名を聞いてまず最初に思い浮かぶのは国旗でした。ですが、そんな私の印象をガラリと変えた存在がいます。それはスイスの寮生活でのある「出会い」がきっかけでした。

寮に着いて一日目のことです。荷ほどきが一段落し部屋を出ると、廊下で何人かが立ち話をしていました。聞こえてくるのは英語ではない言葉です。どこの国の人かなと思いつつ自己紹介をすると、「ロシアから来たんだ。」「私はウクライナ。」「私はロシアとウクライナのハーフだよ。」と。予想外の答えに、私は戸惑いました。「ロシア」や「ウクライナ」と聞いて、その時の私には「戦争」以外、何も思いつかなかったのです。両国の緊張関係を彼らに重ねた私は、「お互い気まずくないのかな」「この子たちの関係もきっと複雑だろう」と、そんな考えばかりに支配され、どう返していいか分からず、「よろしく、また後でね。」とだけ言ってその場を後にしました。

再び彼らと会ったのは夕食のとき。私の頭の片隅には、まだ昼間の先入観が尾を引いていました。でも、席に着くや否や、そんなのは私の杞憂に過ぎなかったと、気付かされました。目の前には、他愛もない会話に花を咲かせ、皆で和気藹々と食事を楽しむ彼らの姿がありました。夏休みの楽しかった思い出を話したり、その夏休みが終わってしまうことを嘆いたり。それはごく普通の、ありふれた、高校生の日常的一幕でした。未だ戦火は絶えず、命を落とす人がいる中、私たちが笑い合えたあの光景もまた、かけがえのない事実なのです。国同士がいくら争っていようと、それが私たちの親交を妨げる理由にはならない。そう思うと、どこか嬉しく、私はそこに平和のかけらがのぞいたように思えました。

そんな彼らと過ごす日々の中で、私の彼らの祖国への印象は、彼らとの思い出に塗り替えられていきました。そしてその思い出が、私のその国への親しみをより一層深めます。思えば、彼らと出会う前の私は、彼らの国について何も知りませんでした。どんな国なのか、どんな人々が暮らしているのか、どんな文化があるのか。だからあの時、咄嗟に出てくるものが何もなかった。でも今は違います。

彼らが教えてくれた曲、ごはん、言葉、どれも私の中に色濃く残っています。私の彼らの国へのイメージは、より具体的で自分の経験に基づいたものとなりました。国旗という「記号」から「大切な友のいる国」へと。

私はふと思いました。皆が世界中に自分の「大切な人」を作れたなら、ニュースの中のどこか遠い国を「身近な場所」として想えたなら、一体誰がその国にミサイルを落とそうなんて考えるでしょうか。分断が深まり、対立が激化する、そんな今だからこそ、受動的なノーションではない、自身の経験に即したイメージを持つことが大切なのではないのでしょうか。

そこで、もし私が次期国連事務総長に選ばれたら、私は国連を一人一人の出会いに寄り添う組織にします。もちろん国を背負った代表たちの議論も必要ですが、その一方で、個人が国家の隔たりを超えて出会い、直接触れ合える場所もなくしてはならない。かつて私がスイスの寮で経験した、あの出会いと交流の場のように、私たちがお互いの国への解像度を上げられる機会を作るのです。私は国連を、国益のぶつかり合う「会議室」だけではなく、人と人とが巡り会う「広場」のような空間にしたい。

そして、その広場の温かさはやがて、凍てついた会議室をも溶かしてゆけると、私は信じています。なぜなら、世界を動かすのは、国家という大きな枠組みではなく、私たち一人一人の力だからです。地球のインフラである国連は、その一人一人を繋ぐ架け橋となり、そっと背中を押せる、唯一の存在だと思います。だから、世界中の人々の拠り所となれるよう、彼らの一步一步を大切に、守り抜くのです。そうして紡がれた軌跡の先に、互いに武器を捨て合える未来があると信じて。